

## 横浜美術館の教育プロジェクトの10年間、その特徴と課題

端山 聡子 | 教育普及グループ 前・チームリーダー、前・主任エデュケーター/前・主任学芸員

大塚 真弓 | 教育普及グループ 担当リーダー、主任学芸員/主任エデュケーター

古藤 陽 | 教育普及グループ エデュケーター/学芸員

### 教育プロジェクトの事業

「教育プロジェクト」は主に「鑑賞」に関する教育普及を担うべく、教育普及グループが独立した際、三つのチームのうちの一つとして平成24(2012)年度に設置された。横浜美術館では開館以来、「子どものアトリエ」と「市民のアトリエ」で実技(制作)を中心に、鑑賞活動も含んだ事業を展開していた。しかしながら、美術館の教育普及活動の主軸が鑑賞分野へと移っていた当時の国内の状況に鑑み、鑑賞や市民協働等を主軸とする新しいコンテンツを加えることで、横浜美術館が実技(制作)と鑑賞という総合性を持ち、教育普及を展開することが期待された。

ここでは、新しいチームとしてスタートした教育プロジェクトの事業の特徴を簡潔に述べることにする。

その特徴の第1は、横浜美術館の所蔵作品を資源(リソース)としていることである。したがって、実施プログラムのほとんどが所蔵作品およびコレクション展となんらかの関わりをもつ。このことにより、プログラム参加者に対しては、横浜美術館の重要な文化資源である所蔵作品に触れる機会が提供されることになり、教育プロジェクトの職員は、取り上げる所蔵作品を調査し、熟知し、教育的に活用することが求められる。

第2に教育プロジェクトは、人材育成につながる事業を展開した。具体的にはボランティア活動、小・中・高等学校教員やJICAの海外研修生等の博物館の専門家を対象とした研修、インターンの育成等がある。また一般募集である中高生を対象としたプログラムについても人材育成につながる事業の一環として長期的に、また成果を小学生に還元するように運営した。これらの事業は、対象者が学校教員等の専門家であるが故に、業務としても難易度が高い。教育普及の専門性を示す指標ともなる人材育成につながる事業は、短期でも毎年継続的に、あるいは長期にわたり実施するので、成果に実りの多いものである。

第3に、後発のチームである教育プロジェクトの事業は、これまでプログラムへの参加がほとんどなかった中高生や、中高生に関わる教員をメインターゲットとした。それは、子どものアトリエと市民のアトリエの対象者・参加者層の年齢や美術に対する指向性等の属性に鑑み、不足を補完するために、あえてアプローチした対象者である。

平成24(2012)年4月にスタートした教育プロジェクトは、2年間程度はさまざまな実践を通して活動内容を検討した。令和5(2023)年3月から過去10年間で振り返ると、主な事業は、下記の八つにまとめられる。前述した三つの特徴、「所蔵作品」「人材育成」「中高生」のうち、各事業においてとくに強く意識していた点を事業名の後ろに付す。

- ①人材育成事業(ボランティア、JICA 海外研修生、インターン、小・中・高等学校の教員等)…… 所蔵作品、人材育成、中高生
- ②コレクション展・所蔵作品を含む企画展に関連する事業…… 所蔵作品

- ③中高生および中学校教員を対象にした事業……所蔵作品、人材育成、中高生
- ④社会包摂の事業（若者支援、特別支援学校に対するプログラム、ボランティアによる英語トーク等）……所蔵作品、人材育成
- ⑤横浜トリエンナーレに関連する事業（トーカー育成、関連プログラム実施）……人材育成、中高生
- ⑥教育プロジェクトの活動から展覧会実施へ……所蔵作品、人材育成
- ⑦実施事業のまとめとしてのシンポジウム開催と報告書の発行……（職員の）人材育成
- ⑧①から⑦以外の事業

## 事業ごとの概要

ここからは、上記事業について項目別に説明を加える。

### ①人材育成事業（ボランティア、JICA 海外研修生、インターン、小・中・高等学校の教員等）

平成24（2012）年度から継続している「ボランティア育成」事業は、視覚に障がいのある方のアテンドと対話による鑑賞を行うことからスタートした。同25（2013）年度から企画展来場者への観覧前のガイダンスとして、ボランティアが企画展の趣旨と代表作品を紹介する「展覧会・ココがみどころ!」を開始した。取り上げる企画展は所蔵作品と関連するものとした。所蔵作品とコレクション展をボランティア活動の基盤とし、通常活動においては、作品・作家に関する文献調査の他、横浜美術館の所蔵作品に関するテーマを立てた。加えて障がいのある方への対応や教育普及そのものに対する理解を深める研修会や勉強会を継続的に実施し、ボランティア活動のための基本知識や態度を養った。

ボランティアの活動には、所蔵作品の調査、研修会・勉強会、事業サポート、来館者案内に加えて、ボランティア自身が担う事業として、3種類の「自主グループ活動」、「ヨコビ探検隊」、「展覧会/ヨコトリ・ココがみどころ!」等がある。学習と学習の還元活動としてプログラムが実施される自主グループ活動「ヨコハマ・アートマップ」「描かれた物語」「丹下健三勉強会」は、最も特徴のある活動である。ボランティアが学び、その成果を一般に還元するという活動の詳細は、令和5（2023）年3月発行の『横浜美術館研究紀要第24号』掲載「横浜美術館の教育普及における所蔵作品とボランティアの関わり—自主グループ活動の共同性から新たな価値創造へ—」（端山聡子）に詳しい。

また、平成27（2015）年度から小学校、中学校、高等学校等の教員を対象とした研修会、同28（2016）年度から子どものアトリエの「アートティーチャーズ・デー」を継承した「横浜美術館コレクションと学校をつなぐ鑑賞会」が開始された。

その他の人材育成事業として、平成24（2012）、同25（2013）、同27（2015）年度には博物館実習を担当し、インターンの育成はヨコハマトリエンナーレに合わせて2回実施した。

### ②コレクション展・所蔵作品を含む企画展に関連する事業

学校連携や社会包摂等の事業のほとんどがコレクション展ないしは所蔵作品と関連している。企画展を取り上げる場合も、所蔵作品を出品する展覧会に限定した。「夏休み子どもフェスタ」は、子どものアトリエの事業としてスタートしたが、教育プロジェクトのボランティアも実施に協力した。平成25（2013）年度から教育プロジェクトチームの職員によるコレクション展のギャラリートークを開始し、令和2（2020）年度まで継続的に実施した。コロナ禍によって実地活動ができない期間は、動画配信で継続した。スタート当初は教育プロジェクトチームの職員が行っていたが、平成27（2015）年度からは、教育普及グループの3チームで取り組む事業となり、コレクション展を企画した担当学芸員も含め、年間を通じてコレクション展のギャラリートークを実施した。同年度からボランティアの活動の一環として横浜市教育委員会が主催する「心の教育ふれあ

いコンサート」連携の「ヨコビ探検隊」を開始、横浜美術館の建物とコレクション展を舞台に、小学4～6年生を対象とする体験ツアーを行った。

### ③中高生および中学校教員を対象にした事業

教育プロジェクトのメインの事業のひとつは、ヨコハマトリエンナーレ2014をきっかけに始めた一般募集による「中高生プログラム」である。アーティストック・ディレクターの森村泰昌氏からの提案がきっかけとなり、長期の「中高生プログラム」を継続的に実施してきた。現代アートと出会い、さまざまな体験をした中高生が、その経験をもとに、小学校高学年の子どもたちに自分たちでプランした展示ツアーとワークショップを実施するというものである。それ以来、休館に入る令和2（2020）年度まで毎年実施し、記録誌を発行した。ここから育った中高生が、大学生となり、同3（2021）-同4（2022）年度のボランティア活動に参加し活躍している。

平成28（2016）年度からは中学校教員に対する長期的な取り組みとして、「横浜美術館コレクションを活用した授業のための中学校・美術館合同研究会」を開始した。令和3（2021）年には「横浜美術館コレクションを活用した授業のための中学校・美術館合同研究会『公開研究会』」と題して、この事業に関する振り返りのシンポジウムを実施し、翌年このシンポジウムを報告書としてまとめた「横浜美術館コレクションを活用した授業のための中学校・美術館合同研究会『公開研究会』報告書—教員と美術館職員による授業案づくり 4年間のふりかえり—」を発行した。

### ④社会包摂の事業（若者支援、特別支援学校に対するプログラム、ボランティアによる英語トーク等）

教育プロジェクト創設当初から、視覚に障がいのある人とない人双方の鑑賞が深まるきっかけとする鑑賞プログラムを行い、社会包摂事業も継続的に実施してきた。平成26（2014）年度からは社会包摂プログラムとして、特別支援学校（中学校）のプログラムを開始。令和元（2019）年度まで年2、3校に対し継続的に実施し、ボランティアがサポートした。社会的自立に困難を抱えるニート、ひきこもり等の若者層を対象とし、市内の外部組織（K2インターナショナル）と連携した「若者支援プログラム」も平成26（2014）年度から開始し、ボランティアがサポートした。このプログラムは令和4（2022）年に事業のまとめと振り返りを目的にシンポジウムを行い、『「若者支援プログラムを解体し、創造する：9年間のあゆみとこれから」報告書』を発行した。その後も継続実施している。

### ⑤横浜トリエンナーレに関連する事業（トーカー育成、関連プログラム実施）

ヨコハマトリエンナーレサポーター（以下、ヨコトリサポーター）を加えたボランティアのトーカー育成および、中高生プログラム、若者支援プログラム、教員対象のプログラム等の既存事業をヨコハマトリエンナーレの内容に合わせて再構成して実施した。STスポット横浜と横浜市教育委員会の共催による教育プラットフォームの学校プログラム事業としても、ヨコハマトリエンナーレを伝えるための中学校への出前プログラムを開催年に特別に募集し実施した。

ヨコハマトリエンナーレにおける100人規模のボランティアトーカー育成では、ヨコトリサポーターと当館ボランティアが合流して多様なトーク活動を数多く担った。平成29（2017）年のヨコトリサポーターのトークが最も規模が大きく、各トークへの参加者の合計が1万人を超えた。ヨコトリサポーターによるトーク実施についての詳細は、前掲の「横浜美術館の教育普及における所蔵作品とボランティアの関わり—自主グループ活動の共同性から新たな価値創造へ—」の資料部分に詳細が掲載されている。

### ⑥教育プロジェクトの活動から展覧会実施へ

教育プロジェクトが行ってきた所蔵作品に関する事業をもとに、二つの展覧会を実施した。「横浜美術館コレクション展

2016年度第2期『描かれた横浜』(会場:展示室3、会期:平成28(2016)年10月1日-12月14日)と、「横浜美術館開館30周年記念/横浜開港160周年記念『絵でたどるペリー来航』」展(会場:アートギャラリー1、会期:令和元(2019)年9月21日-11月10日)である。

平成28(2016)年に開催した「描かれた横浜」展は四つのテーマ(1.新しい街の建設—みなとみらい21地区、2.港の風景—海岸通り・山下公園、3.丘の上の風景—本牧・山手、4.暮れなずむ風景—石渡江逸のまなざし)で構成、58点の所蔵作品と描かれた場所をマッピングした地図パネルを展示した。展覧会は、ボランティアの自主グループ活動「ヨコハマ・アートマップ」と企画の段階から深く関連していた。そこで「美術で街歩き—描かれた横浜をたずねて」というボランティアによる関連事業を実施した。

令和元(2019)年の企画展「絵でたどるペリー来航」は、二つのセクション(1.1854年3月8日/嘉永7年2月10日—横浜上陸の図をめぐる—、2.琉球、旗山崎、久里浜、下田でのペリー艦隊)で構成し、館蔵の稀観本を含め、全24点を展示した。この展覧会は、「横浜美術館コレクションを活用した授業のための中学校・美術館合同研究会」の授業案の作成が企画のきっかけであった。展示室内では40回のボランティアトークを実施した。

#### ⑦実施事業のまとめとしてのシンポジウム開催と報告書の発行

年間のまとめとしては、長期の事業であるボランティア活動や、横浜美術館コレクションを活用した授業のための中学校・美術館合同研究会は、活動期間に応じて成果発表会があった。中高生プログラムは、記録誌を毎回発行した。

数年以上にわたる事業の検証として、長期事業のまとめと振り返りとして、下記のとおり二つのシンポジウムを実施し、その報告書を発行した。

- ・令和3(2021)年12月11日に実施したシンポジウム「横浜美術館コレクションを活用した授業のための中学校・美術館合同研究会『公開研究会』」およびその報告書(令和5(2023)年3月発行)
- ・令和4(2022)年5月14日に開催したシンポジウム「若者支援プログラムを解体し、創造する～9年間の歩みとこれから～」および同名の報告書(同年7月発行)

また、ボランティア活動に関しては、下記の紀要論文において活動の特徴と成果、課題に関してまとめた。

- ・端山聡子「横浜美術館の教育普及における所蔵作品とボランティアの関わり—自主グループ活動の共同性から新たな価値創造へ—」『横浜美術館研究紀要第24号』、令和5(2023)年3月、前掲

#### ⑧①から⑦以外の事業

企画展やコレクション展に関連した鑑賞のプログラムとして、平成24(2012)、同25(2013)年度には、親子を対象とした鑑賞ワークショップとチケットの割引(鑑賞優待)、閉館した夜の横浜美術館で企画展担当学芸員の解説をじっくり聞く「夜の美術館でアートクルーズ」等を実施した。また、所蔵作品の鑑賞シートを作成した。この他にも多数あるが、単発的なものは紙面が尽きたので割愛する。

## 課題および展望

教育プロジェクトが担った教育普及活動は、チームの立ち上げ当時に実施されていた横浜美術館の活動を参照しつつ、当館の事業計画に沿って内容を検討したうえで行った。教育普及活動において事業の継続性は開始にあたり検討すべきである。リニューアル開館に向けて、これまで実施してきた各事業の目的・内容を今後の当館のミッションや事業計画と照らしてどのように継続するのか、あるいは取りやめる/休止する等の判断が求められる。とくに継続性が重要であるボランティア

活動、学校連携、社会包摂（中高生プログラム、若者支援、特別支援学校に対するプログラム）等の事業については、安易に中断してはならない。

加えて横浜美術館の教育普及活動は今後、所蔵作品やコレクション展にこれまで以上にコミットしていく方向性を打ち出しているが、そのためには職員自身が所蔵作品と関わり、その深い理解や知見と教育的配慮を併せもって事業を展開していく必要がある。膨大な所蔵作品の文献・情報に効率よくアクセスするためには、これまでの教育プロジェクトの事業を通じて蓄積した文献のキャビネットや作品カードの活用と、作品・作家調査のための文献や情報の収集を教育普及グループ全体に広げ、絶えずこの事業基盤の整備を継続することも必要だと考える。教育的な方法や発想も活動のリソースだが、もうひとつの重要なリソースが所蔵作品やコレクション展であるならば、所蔵作品やコレクション展との関わりは表層的なものではなく、調査研究に基づき、所蔵作品を適切に、かつ教育的に用いるべきである。見えにくい基礎であるが、ここに力を入れることが、当館の教育普及担当職員の専門性の向上にもつながると考える。